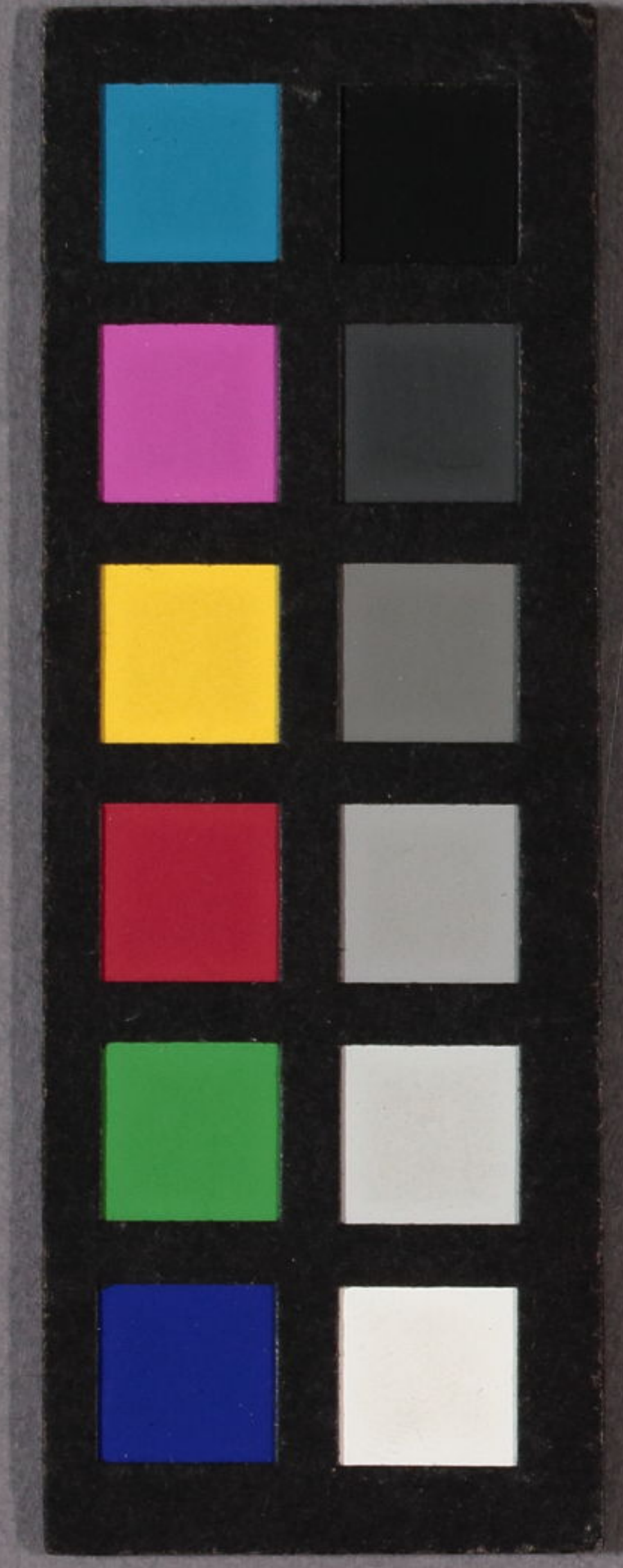


中景
子成子集

辰



緘あふまほしくはまの山あふ
おもふる也

加陽槐庵二世

大ニ又

安政二と末初を



掌中千代尼舜句集

去々初

業且

えりもまみりたるくや花のま
ましいまえまらやまのま
花のまやちりのまあまら
寶和よるあうかうたり
まやうの田毎う出まて初日歌

きつぬの葉見らばあ〜初る歌

亭々菜本且

一板箱てかのとこのい〜々歌のま

人日

七葉中慈ふもりのよくまうり
七叶中慈ふもりのよくまうり
七叶中慈ふもりのよくまうり

芥

何やらの時をきく根芥この歌

菜

あハたのや〜い〜わさあらみ
い〜その〜の〜の〜の〜の〜
あ〜い〜の〜の〜の〜の〜の〜
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜

あはれなるかたのこころを
かへりてかたがたのこころを
かへりてかたがたのこころを
かへりてかたがたのこころを
かへりてかたがたのこころを
かへりてかたがたのこころを
かへりてかたがたのこころを
かへりてかたがたのこころを
かへりてかたがたのこころを
かへりてかたがたのこころを

梅

あはれなるかたのこころを
かへりてかたがたのこころを
かへりてかたがたのこころを
かへりてかたがたのこころを
かへりてかたがたのこころを
かへりてかたがたのこころを
かへりてかたがたのこころを
かへりてかたがたのこころを
かへりてかたがたのこころを
かへりてかたがたのこころを

海苔のそとにハ糖と聖梅

三

あつちのそとにハ糖と聖梅
あつちのそとにハ糖と聖梅
あつちのそとにハ糖と聖梅
あつちのそとにハ糖と聖梅
あつちのそとにハ糖と聖梅
あつちのそとにハ糖と聖梅
あつちのそとにハ糖と聖梅
あつちのそとにハ糖と聖梅
あつちのそとにハ糖と聖梅
あつちのそとにハ糖と聖梅

あつちのそとにハ糖と聖梅

梅

あつちのそとにハ糖と聖梅
あつちのそとにハ糖と聖梅
あつちのそとにハ糖と聖梅
あつちのそとにハ糖と聖梅
あつちのそとにハ糖と聖梅
あつちのそとにハ糖と聖梅
あつちのそとにハ糖と聖梅
あつちのそとにハ糖と聖梅
あつちのそとにハ糖と聖梅
あつちのそとにハ糖と聖梅

まはるしきまて雪ハ清みなり

梅

人のあふふとよまのさくら
はまきよりあけまこの初まくら
あけまきとほろまのあけ初梅
うままこの日ハあけ梅初梅
花ちや人の嵐ハ雪まうり
白妙もいつしうきまのふ

あふふとよまのさくら
はまきよりあけまこの初まくら
あけまきとほろまのあけ初梅
うままこの日ハあけ梅初梅
花ちや人の嵐ハ雪まうり
白妙もいつしうきまのふ

月影もよし中橋の影おふし
山橋もよしつらふはまはまの
近よきつらふ離まこし山さくら
月もあさく道狭くはまはま橋外
物こつけし橋のあまや山さくら
山さくらあふんあふん花床り
あふんあふんあふんあふん
さのよふものよふりきえん

日をおもむく短くはまはま

あま

とちむらえ送るよふを花屋

武蔵の方へゆくよ

東路の花はまはま盛りのあ

あまはま

よふあふんむけよあふんのあ

あまはま

あまはま

うらみをもよめはるや并の花

花

まの年えいさくせ色いの花
花のうやいさくせ色い花
花のうやいさくせ色い花
いさくせ色い花
花のうやいさくせ色い花
花のうやいさくせ色い花
花のうやいさくせ色い花

花

花のうやいさくせ色い花
花のうやいさくせ色い花
花のうやいさくせ色い花
花のうやいさくせ色い花
花のうやいさくせ色い花
花のうやいさくせ色い花
花のうやいさくせ色い花

花

花のうやいさくせ色い花
花のうやいさくせ色い花
花のうやいさくせ色い花
花のうやいさくせ色い花
花のうやいさくせ色い花
花のうやいさくせ色い花
花のうやいさくせ色い花

おしとま

おしとまにまゝにゆゑのたふはあつらひ
おしとまにまゝにゆゑのたふはあつらひ
おしとまにまゝにゆゑのたふはあつらひ

おしとま

更なる

おしとまにまゝにゆゑのたふはあつらひ
おしとまにまゝにゆゑのたふはあつらひ
おしとまにまゝにゆゑのたふはあつらひ
おしとまにまゝにゆゑのたふはあつらひ
おしとまにまゝにゆゑのたふはあつらひ

おのふ

おのふに待ねしおのふの
うのふも日よもちふらうのふ

牡丹

吹了んそ風のよみも牡丹か
さうそふらものと屋も牡丹か
老のふんる日のもまからんか
持新ハおまらうもかふるおらんか

牡丹

面影のうらや果やかさし
袖洗ふ流きさうし牡丹

漢仏

おのふのふもさけやふは
詩幾き

おのふのふもさけやふは
おのふのふもさけやふは

竹の子

竹の子や其日のうらやまのしほ

飾ふ

と云はれて成て千早か遠く

美作のたは日あかか

婦人の足跡

そこのきほまのまり

公

西津野や山くらゐの

聖のたはまをそく

時きたうまの

た

道

あか

おも

る

百合

非中よりやうらふらふら
よめ百合や染みぬかき
多鶏

水着ハ水子もくしこく

草

下草のよ草のよ草のよ草
川草のよ草のよ草のよ草

茨

花と針のいさゝか

草薺

花らうもぬらう名のなるあやめ
次はあやうらうのあやめ
花らうもぬらうのあやめ

草薺

あやめ

田植

連ふまをぬぬと返くくつふ
まの神のおますはぬもあま田植か
田植あしつふ有よ道きうう
まふまうまをけうふ田植うま
まし女やけうま植ううつまもあ
夕息
夕暮や女この肌のはるまよとま

田植

ふるうやおわてつよまよ置の鏡
あま
まはまのハ草の水あつぬのあ
短衣のたのる花うや紅まうけ
田者
まうくくまうまのハけうま黒くけ
まうくまうまのハ赤まの口まけ

水のゆるいところへまきしきぬ目くら
埃の電のゆるい目くらまきしきぬ目くら
入るゝ散れりゝるちりさうあ

そは

うさくさや埃のちりくは押入る
せきふりまの撃ちくや埃のらと
流すよまふ根の白濁こくま
そはとりおとくまゝところ

そはのま

そはのまや流すよまふ根のらと

そは

流すよまふ根のらと
そはのまや流すよまふ根のらと

そは

そはのまや流すよまふ根のらと
そはのまや流すよまふ根のらと

おれえおのちけしと増のち

納涼

おのちえようみはらすぬと涼り
涼風や押合たる竹とま
涼しや指くの吸ひりり
涼しやあちとあして露の首
涼しやちの届うとねのち
涼風のさし涼しやち

お坊の暮しとくく涼しう

送る

道えそのさしやちその涼し
涼しやちしちとねのち
あいさう
涼風の暮はあき信居りち
涼風のくまのち
あいさう内あのおち

ふ雨越の日和山よそ

ゆらゆらの道よりあー日知山

夕立や幸ふふあまのーとて

きよみ

眼よささるるるハ清くうそ

おぬを極そすこーそ

あいきり

行むけハされいふならしそ

送る

いらちとま目たうもそ

故状 まよふて

親てアら極そこら故知の度

煩悩ハやふいの故れめー

善哉ハ深き道のそ

めーおけしもま〜ん

揖〜も〜ん

多うお〜も〜んをたて故の肉

湯の虫 夏に二早

おのろ名持作のどくろふ狐の
蓮の茎のうてあふすうる 鱒の

清水

山のすそを蛇の窟むすふ清水の
青の〜と見えを根のある清水の

智の窟に赴く人

清の風と水の〜〜〜清水の

秋さ〜〜〜清水の

れ〜〜〜清水の

秋の方へ旅〜〜人

た〜〜〜清水の

此の如く

清の〜ハ〜表もあ〜

夏の日

釣竿の糸〜〜

画如具

紅白中又ある時ハ起はし

稲妻

いあつちや特のまらよつれり

稲妻の旗をぬきやあの上

いあちや何よまら〜つげち

夏の宿花野

たきくの女の上まらぬ花野

川幸の屋ハきり〜まの野

切草男

秋の野や道とある草成らぬ草

〜もき散舞中夏のたき

草のたや手よ〜るあは笑

送る二書

下流を笑あ〜あよ道の〜

月送るよ目のたき〜あを

あゝさくら

千秋城咲むさくらやさきの産

尾花

秋風のりつまつにさる尾花

晩穂ふいころり洗む尾花

美しき

日和くさくハはくさのやま

画賛

雉子の片手隠しさるる産

子種貝の歌

波のくさ秋の咲あり子種貝

せ戸 みまのうぶ

よーあーの種を子種を二見

画賛二章

芦の葉ふ風の拾ふや捨小ふね

芦の葉ふすくね尻とちり

桔標 廿秋

桔標の不味時ホト云さしれ

刺 葉の人

はきとえそあうよぬきを花の不

鷲双着

鷲双着やあくてもめの子てあ

鷲双着や万ことのきすハ根ふきし

西瓜

くくくハものくくくハ西瓜外

秋 風 虫

木くものくくくハきや秋のくせ

水あゆて水くハくくぬ情 けり

りあよおのくくくハくくハ

中のまよふらハくくハ降くあハ

中のまよやあハおさきくくハ

院持の筆よきやきくハ

月

名月や人子押合ふとりの乳
明月やたけともくねのうけ
明月やきくさつものあひのき
何となくとくしうちるつよえは
明月やるも寝くくの戸まはら
月えまも陰あしくや女子達
名月の船やあそこもいふよし

111

名月やアサをさるぬるるもあし
伏足のあまて
之日月のこころけようけいあひの月

画賛ニ章

まぬく月よもなりて明おしと
明月やけきあそこのまはあ士のけ
名月やあそこのまはあ士のけ
名月やあそこのまはあ士のけ

111

十六夜やいとよしのと云果ぬらち

初 序

初丁やまのやうんより夜もすまら

まのころや通るころてあたまなり

はらうアヤ山へ登れハあまはるん

初丁やまゝくしてすハおー

鶴

少人の目の色おもしろくま

鶴あま針のこゝろく鶴りあ

あまのれも秋をアまきぬ鶴り

蒲萄 柿

あまのときもあやふさふとくあ

あまのあまのあまのあ

あまのらうまのあまの柿のあまの

あま

菊のらあめて人のあまのらり

歌

夕暮の身ハ持ふるくし秋の風

三思時心

百生や憂一まじりの心よ

一瓢菴うそ

九十九をよめる持ふる瓢外

とる瓢

おち瓢や日みく水の心ろくま

おとそ

夕暮の身ハ持ふるくし秋の風

さふ出てけも想ふやさるおとそ

鏡心

雪うらぬさくハともなきおとそ

麻 礎

夕暮の身ハ持ふるくし秋の風

さふ出てけも想ふやさるおとそ

鴨 追書

鴨 たちやよき日のくまのちかきさかちか

きよし

百とあひのき日も鴨のゆかりあり

きよし 秋

秋 ちかやまてまのくまのちかきさかちか

ちかやまてまのくまのちかきさかちか

三十一

冬 の 歌

時 句

時 句 ちかやまてまのくまのちかきさかちか

ちかやまてまのくまのちかきさかちか

ちかやまてまのくまのちかきさかちか

ちかやまてまのくまのちかきさかちか

ちかやまてまのくまのちかきさかちか

三十一

帰菰

笑くも果もくもありゆりふ
土の表の多とそ笑や帰を
と為す

とよこ意くはとよ表おとて為す
那竹の笑もあやむる為す
とよ山の意

清くくつうぬものはおちと外

枯尾ふははるん

根ハ切て極ふあ枯尾とふ

安ん

とれくも風よあつて枯尾ふ

大根引 せき

とくさのきふハおもし大根引
陰もの根とくささるせき
ふのちうくさる根ハあしと引

我名火焼

待たまふも暇もあまき我名うま
とてたてての飯の食らあうりり
尾うまうりり時

あまやうまの焼ゆて火焼れ
氣は師の焼うまうりり臣焼れ

鴨 三十三カ

池のま鴨あまうりり時

花よと鴨の焼ゆのみまきり

水仙

水仙あまうりり時

水仙あまうりり時

あま

あまうりり時

あま

あまうりり時

三十四

花とあつたやとあつたやとあつたのあつた

花

花とあつたやとあつたやとあつたのあつた

花

花とあつたやとあつたやとあつたのあつた

花

花とあつたやとあつたやとあつたのあつた

花

花とあつたやとあつたやとあつたのあつた
花とあつたやとあつたやとあつたのあつた
花とあつたやとあつたやとあつたのあつた
花とあつたやとあつたやとあつたのあつた

三十四

返か

賀助於平山春撰集

月夜やうららかにある里の内

乙由の方へ女巻しける端子

ふ咲ぬ身は寝よき「梅」外

家子成夫いりる時

晴陰廻りてはあはれいづれ

結のまきまきもさうりあ田の
まはるくはなよあはれのま
まはるくはなよあはれのま
まはるくはなよあはれのま
まはるくはなよあはれのま
まはるくはなよあはれのま
まはるくはなよあはれのま
まはるくはなよあはれのま
まはるくはなよあはれのま
まはるくはなよあはれのま

不詳

仙

あまのつとむらもとめて 咲くもの
あまのつとむらもとめて 咲くもの

沖幸の雪像ふはな細く伝る

北山仙女

ふんこの声なきよもあたまのこころ

わらうちうもや昔のまじりあ
全代

ほくまいの神よ「波」ささきを

綾のたよふ行をめさるし
仙

つる〜と色くさき 鞠の夕月夜
全

垣の本檜のあとあうりう
全代

う
かえりもそとまのまのほろも
全

風ハあきともあまのあ
仙

新誠のうろ返りかろふうねの結
全

焼飯の宿のサキ事迅速
全代

暗さ屋のまろ〜はな屋や店の子
全

類も〜く〜遠路師あら
仙

ふんハ業舞子花の〜して飛
全

山口

了の耳ふもさのさる刻
 いのしちややすうあつる十二
 杉のちや〜枝の枝れ戸
 時ハ今ぢふささるさ月と花
 丁重名流ふ能舞たやら
 仕舞ふ火燵ふ階成やさる
 娘子押ふかくれ〜茶
 茶物ち〜と徳の徳さる

全代 全仙 全代 全仙 全代 全仙

ころを流のころう日の
 るふさ成流てす〜し李の輝
 階階の舞ふあの花瓜
 文基も料紙も月もゆ〜さ
 ま〜さの糸の流るもさ流る
 染るし片山ふさあ切たも江
 ける子細〜天定をめる
 ち〜すも流の轉進もめ〜

全代 全仙 全代 全仙 全代 全仙

小春のふきのとうやまふ只
 四^ニふ^ニふ^ニふ^ニの鳥の衣川
 一^ニく^ニく^ニく^ニく^ニの梵論し
 昔のまぢの山暮るよ白雲のちぢけ
 物^ニの^ニ度^ニの^ニき^ニあ^ニる^ニら
 こん^ニは^ニく^ニの^ニ化^ニ粧^ニの^ニ新^ニ鹿
 ありあけの百^ニ色
 仙 全 代 全 仙 全 代

ひととまのあのをみや時多 千代
 思^ニん^ニて^ニ決^ニみ^ニの^ニ花^ニの^ニ中^ニ 大系仙女
 きのあふはち^ニし^ニく^ニけ^ニる^ニ檢^ニ査^ニふ 全
 陵子に度るは^ニぬ^ニる^ニる^ニえ 代
 月ハ思ふよ^ニね^ニる^ニあ^ニは^ニぬ^ニや^ニら 全
 夢^ニと^ニ時^ニと^ニの^ニよ^ニい^ニ眠^ニつ^ニき 仙

三十一

おまゝくハ叔父を乗山子頼
 下々ハ信成塔工能あけ
 太くはたうと地中の金まよ
 晴てきくしむるのそみ
 おえしちち夕魚の先北おち
 ちやまらの口よ子ありの
 伊成ハ人月北夏の火也帯
 ちよらうとてさるるる月

仙 全 代 全 仙 全 代 全 仙

庚辛子印しあハたまこと新屋あし
 麻ハ丸とより尾まで満し
 別合の花の咲日ハ待せける
 爰はさくくとやすむまは
 ニラ 塔ふるのくさせは舞ふ音あ
 夕日あらしそふ葛屋の背戸
 龍舟の意はかやうとくあつくと
 悟るまふワさる福の迷はく

仙 全 代 全 仙 全 代 全 仙

四

思はゆるよ〜原き〜めりこ子
 杖よりより昔蒲をんあり
 木の写う〜鏡のある鏡寫す
 我彈琵琶は海をりり
 村々の詠とならう〜山おろし
 茶を沸はると十六夜の月
 保粟の〜ゆ〜昔る麦の花は咲
 何事らの秋の葉の業橘

仙 全 代 全 仙 全 代 仙

世にまよふと〜と〜く〜花のり
 錦細敷の魚よおとろく
 下は〜あ〜白ぬの綿をえて
 笑〜〜花のさき
 花〜〜花〜〜花〜
 花〜〜花〜〜花〜

仙 全 代 全 仙 全 代 仙

海子代女

麦林

ふの名の葉をきりーふのき

あまのこ日乾もあめあまに 千代

うきま雀の舞葉をささき 蒼葉

れおききと持ふ雨葉 風二

栗林の目下の門は多のさよ 東葉

うきまのくまをハ近よる 乙峯

アのゆも葉合をさる 海 代

え三大河橋の川もさる 林

灯城のゆもを状の葉とめて 二

杜子の筒の葉の葉うら 山

あまのこ日和をさる 葉のさ 峯

あまのこささきの葉を 葉 棠

山口恒久

山口恒久

